

2026年度

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んで下さい。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開かないで下さい。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。問題冊子は受験番号のみを記入して下さい。
3. 試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは、手をあげて下さい。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出て下さい。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないで下さい。
6. 字数制限のある問題については、句読点なども1字として数えるものとします。

受験 番号	
----------	--

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「中学二年生の朝佳は、怪我のために陸上部を休部している。いとこの晋吾がラジオ局に勤めることになったと知り、朝佳は初めてラジオを聴いた。ラジオの公開収録にも行き、そこで同い年の柚葉と出会う。柚葉は、物語を書くのが好きで、公開収録では柚葉が投稿した作品が読まれていた。朝佳は柚葉の才能に驚き、一方の柚葉は、ラジオのパーソナリティをやってほしいと思うほどに朝佳の声がいいと感じていた。それを知った朝佳は、声を使うことに興味を持ち始める。柚葉は、ラジオ番組の募集する朗読コンテスト用の短編作品を書くことにした。」

「——うん、だいぶよくなったね。もうそれほど、日常生活にも支障ないかもしれないね」

カーテンが引かれた処置室で、ごま塩頭の関本先生が朝佳の足首を見る。今日は母に付き添ってもらって、かかりつけの整形外科である関本医院に来ていた。

「ありがとうございます。ここまで治ってほっとしました」

朝佳の笑顔に、関本先生は「ふむ」と、まだらなあごひげに手をやった。

「山根さん、なんだか表情も明るくなったんじゃない?」

陸上を始めてから、ちよつとした故障や不調のときには必ず関本医院に来ていた。長く付き合いがある先生だから、ささいなことも見逃さないで話題にしてくれるのだ。

朝佳は先生の言葉に、はにかんだ。

①「最近、ひよんなことからラジオをよく聴いていて。同じ番組を聴いている子と、仲良くなったんです」

関本先生が「へえ〜!」と大げさな身振りで驚く。

「ラジオかあ、懐かしいねえ。中学生で聴いている子は珍しいんじゃない? 僕は学生時代によく聴いていたんだけど、それだけじゃ物足りなくなつて、自分たちで放送部を結成して、医学部の仲間たちとパーソナリティの真似事までやってたよ」

「ご自分で、トークをされていたんですか？ たしかに、私たちの世代って、いまの子よりもラジオをよく聴いていましたよね」
関本先生の話題に、母が乗る。朝佳は二人が和気あいあいとラジオ談義する姿を横目で見ながら、胸が静かに熱くなるのを感じた。

（先生、私と同じだ。ラジオを聴いているだけじゃ飽き足らなくて、自分でしゃべり始めただなんて）
足を傷めてから、どうにも元気が出なかった。でも、久しぶりにわくわくしている。

帰り道、助手席の車窓から雨上がりの空が見えた。灰色の雲が風によってちぎれ、ゆっくりとした速度で動く。止まっていた朝佳の時間も、一緒に動き出した気がした。

かばんのなかでスマホが震える気配を感じて、朝佳はそれを取り出す。柚葉からメッセージが届いていた。

『短編賞のコンテスト用に、原稿を書いてみたの。応募前に、朝佳ちゃんに読んでもらいたくて』

朝佳は素早く指を動かし、返信する。

『病院終わったところなんだ！ よかったら、明日待ち合わせしない？』

柚葉からすぐさま、『ありがとう』という返信とともに、デフォルメされたうさぎのスタンプが届く。柚葉のラジオネームを思

い出し、朝佳は和んだ。

車は自宅の車庫前でとまる。ドアを開け外に出たら、秋の涼しさを含んだ風が、ひとすじ頬をなでていった。

翌日朝佳が緑地公園に来ると、柚葉はベンチで待っていた。そして紙の束に目を落としている。草を踏んで近づくと、柚葉が視線を上げ、「応募作」と文字が印刷されたA4用紙を朝佳に渡してくる。

「あんまり自信ないんだけど、でも一生懸命に書いたつもり」

朝佳は受け取って、1 目を通そうとし——途中まで読んだところで、思わず口に出していた。

「ね、柚葉ちゃん。これ、声に出して読んでみてもいいかなあ？」

とたん、柚葉がびくりと固まった。朝佳はその反応に驚いて「だめだったかな？」と聞き返す。柚葉が、朝佳に上目遣いをし

て「笑ったり、しないよね？」と確認するように聞いてきた。柚葉の口元が震えていることに朝佳は驚いて、「もちろん、笑ったりなんかしないよ！」と、大きな声で告げた。柚葉は「それなら、大丈夫」とうなずいた。

朝佳は「じゃあ」と言い置くと、原稿の最初に戻って、冒頭から地の文と台詞せりふを声に出していった。地の文は落ち着いた声で、反対に台詞は心をこめた声で。緑地には幸い人はいなかったから、誰に気兼ねすることも無い。

そのままラストまで読み終え、朝佳は叫んだ。

「え、このお話すごくいいじゃん！ 柚葉ちゃんがこめた想おもいが伝わってくるよ！」

朝佳の言葉を聞いた柚葉も、心底驚いたように声を震わせた。

③「すごい……物語を声に出して読むだけで、世界が立ち上がるんだね。私の書いたお話が、まるでドラマみたいに聞こえちゃう」
その表情は、さつきと打って変わって光が射さしたように明るい。

柚葉の言葉に、朝佳は自分でもわけがわからないままに（これだ！）と感じた。走ることができなくなって、腐くってばかりの日々だったけど、新しく熱中できることを見つけられたかもしれない。

ただ、いまはまだそれを言葉にして柚葉に伝えることまではできず、朝佳は「また頭から、読んでみていい？」と聞くにとどめた。柚葉が「いいよ、むしろお願いします」と、花のつぼみが咲きほころぶように微笑ほほえむ。

寄り添いあつてひとつの原稿に目を落とし、談笑する。そんな朝佳と柚葉を見下ろすように、秋めいてきた空をトンビが旋回していた。

週末の午後、朝佳はマドレーヌの箱を提げて祖母の家へと向かっていた。バスから降りて五分、たどりついた祖母の家の前では、庭先のハナミズキが色づきはじめている。

先日、晋吾からのお願ねがいがあった。晋吾の祖母である美江よしえは、朝佳の祖母でもある。晋吾と朝佳の母親が、年の離れた姉妹なのだった。

晋吾の話によると、祖母は最近目の調子が悪くなり、大好きだった読書があまりできなくなってしまうらしい。もともとす

ごく快活な人だったのに、最近元気がないから、朝佳が訪ねてやってくれたら嬉しい、と彼は電話口で話していた。ドアチャイムを鳴らすと、伯母おばが玄関に現れて、朝佳を部屋に招いてくれた。居間の大きなソファに祖母が座っていて、朝佳に笑いかけてくれる。

「足はどう？ すごく心配していたんだよ。もう痛くないの？」

朝佳はお土産の箱を伯母に渡すと、祖母の隣に腰かける。怪我をした**いきさつ**や、現在はほぼよくなってきたことを話した。

「おばあちゃんこそ、目がよくないんだって？」

「そうそう、やっぱり、視力がだいぶ落ちてしまつてね。読書だけが楽しみな人生だったのに、残念だよ。好きな本が自由に読めなくなったから、たださびしいね」

祖母は昔から無類の読書家だった。幅広いジャンルの本を（Ⅰ）に読む祖母は、知識も話題も豊富で、朝佳はいろいろな話を聞かせてもらうことが大好きだった。

朝佳がしみりしたのを見て、伯母が「でもね」と話し始めた。

「おばあちゃん、最近はおーディオブックを聴いたりしているのよ」

「オーディオブック？」

耳慣れない単語に顔を上げると、伯母がタブレットを持ってきて操作し始めた。

「小説や実用書を人の声で読み上げて音声データにしたものを、オーディオブックっていうのよ。それをおばあちゃん、聴いているの。——いわゆる『耳読書』かな。だけどすべての本がオーディオブックになっているわけではないから、望みに応えられないときもよくあるけどね」

祖母が大きくなずいた。

「そう、耳で読書ができるのはありがたいんだけど、読みたい本がどれでも自由に読めるわけじゃないのは、ちょっと残念だねえ」

出されたおかきを食べながら、何事かを考えていた朝佳は「あつ」とつぶやいた。^④突如ひらめきが降ってきたのだ。

「ね、おばあちゃん。私がおばあちゃんの好きな本を、どれでも読んであげるよ！」

「えっ」

「ええ」

朝佳の提案に、居間が 2 になった。祖母が気遣わし気にたずねる。

「そんなことしたら、朝佳ちゃんの声がかれてしまわない？ 大変すぎるでしょう」

祖母の言葉に、朝佳はかぶりを振った。

「私ね、いま、自分の声を使うことがすごく楽しいの！ だから、読みたい本があったら、私に読ませて」

朝佳の心に火が灯り、燃え上がった瞬間だった。前のめりの熱意に、祖母は「それなら」と、伯母に声をかけた。

「喜代子、あの本を持ってきてくれない？ ほら、向田邦子の『字のない葉書』が入っている本。朝佳ちゃんが読んでくれると
いうのなら、ぜひ聴いてみたいね」

「あ、それ、たしか二年生の教科書にも載っていた作品だった！ まだちゃんと読んでなかったけど」

祖母のほうに身を乗り出す朝佳を見やって、伯母が立ち上がった。

「はいはい、ちよつと待っててね」

伯母は奥の部屋に引っ込むと『眠る 盃』と表題された一冊の単行本を持って戻ってきた。そのまま、祖母にそれを手渡す。

祖母は、 3 色あせたページをめくってから、朝佳に本を渡した。

「疲れたら、休むんだよ。はい、ここからどうぞ」

「じゃあ、読むね。—— 死んだ父は筆まめな人であった。私が女学校一年で初めて親許を離れたときも、三日にあげず手紙をよ

こした。—— ええつと」

そこまで読んで、朝佳はひっかかりを覚える。

「おばあちゃん、筆まめって？ 女学校ってというのは、いまの私たちの通う学校と違うの？」
たずねてから、朝佳ははつとして、頭を抱えた。

「ああ、こんな風に立ち止まってばかりじゃ、おばあちゃんが十分に聴くことを味わえないね」

祖母は 4 笑いだした。

「朝佳ちゃんは、朗読をやりたいんだね。人にお話を聞かせるというのは、すごく事前準備がいることなんだよ。たくさんたくさん、練習して、またイメージを自分のなかで固めて読まなくちゃね。いいよ、まずは通しで読んでごらん。短い話だから、朝佳ちゃんが上手になるまで、何回でも聴こうじゃない」

祖母は「いいかい」と朝佳に向き直る。

「筆^{おん}まめとは、億劫^{おん}がらずに手紙や文章をまめに書くこと。辞書で引いてごらん。女学校も、自分でどういものか調べてから読むといい」

そう言って、辞書を貸してくれた。

朝佳は辞書を引き『字のない葉書』のエッセイのなかでわからない単語の意味をすべて調べた。

学童疎開、という言葉も聞いたことはあったが、意味を初めて知った。太平洋戦争の際に激しくなった空襲から守るため、都市部の学童を近郊農村や地方都市へ集団移動させた——そんなことがあったのだと、朝佳は想像してみる。

単語を調べきったあと、十回ほど通して読み上げたとき——いきなり、怒りんぼうで大酒飲みの父親が家族を思う気持ちや、幼い下の妹が毎日葉書に丸をつけた気持ちや、朝佳のなかに染^しみ込んできた。妹を喜ばせようと家族が並べた二十数個のかぼちゃも、ばあつと目に浮かんだ。

単語の意味や、文章の流れを理解して読み上げたその声は、いままで出してきた声とぜんぜん違っていた。

「朝佳ちゃん、いい感じだよ。朝佳ちゃんの声で耳読書ができて、嬉しいよ」

祖母がにこにこする。朝佳もたしかな手ごたえを感じて、ぐっと気持ちが上がるのを感じた。

（上田聡子『あの子の隣で待つ春は』〈文研出版〉より）

注1・パーソナリティ……ここでは、ラジオ番組などで司会進行をする人のこと。

注2・デフォルメ……形を変えて表現すること。

注3・スタンプ……スマートフォンやパソコンを介したメッセージのやりとりなどで使用する、小さなイラスト。

問一、

1 2 3 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、からからと イ、ひらひらと ウ、ばらばらと エ、しんと オ、ざつと カ、つんと

問二、

波線部 a・b の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「はにかんだ」

ア、感情が高ぶった イ、戸惑いを感じた ウ、恥ずかしがった
エ、誇らしくなった オ、わずかに困った

b 「いきさつ」

ア、関係 イ、経緯 ウ、原因 エ、行為 オ、時期

問三、

(I) に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、単刀直入 イ、一日千秋 ウ、竜頭蛇尾 エ、縦横無尽 オ、針小棒大

問四、 傍線部①「関本先生が『へえ〜!』と大げさな身振りで驚く」とあるが、このときの関本先生のようにして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、朝佳よりも若い頃の自分のほうが独自にラジオを楽しんでいたので、それを自慢しようとしている。
- 2、朝佳にラジオを通じて友人ができたと聞いて、自分の若い頃と比べて変わっていると驚いている。
- 3、朝佳がラジオのおかげで明るくなったことを聞いていたが、本人の前では知らなかったふりを演じている。
- 4、朝佳も自分の若い頃に楽しんでいたラジオに興味を持ったと知り、意外に感じながらも喜んでいる。
- 5、朝佳がラジオを聴いていると言ったことで、少し背伸びをしすぎているのではないかと心配している。

問五、 傍線部②「止まっていた朝佳の時間」とあるが、これが具体的にどのようなものであったかを表していることばを、二十二字で本文中から抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問六、 傍線部③「その表情は、さっきと打って変わって光が射したように明るい」とあるが、この説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、冷静なようすから、自分の能力の高さに気づき興奮しているようすに変化したということ。
- 2、心を閉ざしたようすから、気持ちが大きくなり遠慮がなくなったようすに変化したということ。
- 3、不安そうなようすから、感動や自信を得られた喜びを感じているようすに変化したということ。
- 4、恐怖を感じていたようすから、思わぬことを言われて驚いているようすに変化したということ。
- 5、戸惑っていたようすから、馬鹿にされないとわかり安心していうようすに変化したということ。

問七、傍線部④「突如ひらめきが降ってきた」とあるが、この「ひらめき」について説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることを、【 1 】は十六字で、【 2 】は八字でそれぞれ本文中から抜き出しなさい。

【 1 】と感じ始めた自分が、【 2 】の代わりになるという考え。

問八、傍線部⑤「辞書で引いてごらん」とあるが、辞書を利用した結果、朝佳の朗読にはどのような変化が生じたか。四十字以内で答えなさい。

問九、本文中から読み取れる、朝佳についての説明として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、 柚葉の前で声を使ったときよりも祖母に本を読んだときのほうが大きな喜びを感じられ、興奮を隠せずにいる。
- 2、 自分の声は柚葉や祖母の力になれることがわかり、多くの人を助けるために声を使う練習に励もうとしている。
- 3、 物語を読むことで生まれた柚葉との友情をより深めるために、祖母からのアドバイスを真剣に受け取っている。
- 4、 怪我によって気持ちが沈んでいたが、柚葉や祖母の励ましを受けたことで陸上への未練がなくなり始めている。
- 5、 文章を読んだときの柚葉の反応や祖母の言葉から、夢中になれることに出会えたという手ごたえを感じている。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ふだんの私たちは、たくさんのことについて「知っている」と言っています。

1 1 いま目の前aにあるのがイスだとかコン

ピューターだとかいうのを「知っている」し、自分の部屋のことも「知っている」でしょう。私たちはイスを公園とは呼びませんし、コンピューターをフライパンとは呼びませんし、自分の部屋をリンゴとは呼びません。そのように呼ぶのはまちがいです。そんなまちがいはありません。イスは絶対にイスですし、コンピューターは絶対にコンピューターですし、自分の部屋は絶対に自分の部屋です。まちがいがなく絶対にこうだと思っっていることこそが、「知っている」ことです。

このように「知っている」ことを、自分自身しか知らないということはありませぬ。たいていほかの誰かも、同じように「知っている」と言ってくれます。私たちがイスだと思っっているものを、別の誰かが電子レンジだと言い張ることはありませぬ。誰もがイスをイスと呼びます。

逆に、「知っている」はずのことを「知らない」と言うひとがいれば、そのひとは何かおかしいのではないかと感じてしまうかもしれません。たとえば身の周りに、イスをイスだと「知らない」と言うひとがいたら、どう思うでしょうか。そうやって「知らない」と言うひとがいれば、「そんなの知っっていてあたりまえだよ」とか「それは常識だよ」とか思ったり言い返したりしてしまうのではないのでしょうか。

世のなかでは、誰もがごく自然に思っっていること、
2 誰もがふだん「知っている」と言っっていることを、あたりまえのこと、ふつうのこと、常識だと呼んでいきます。イスがイスなのはあたりまえのことです。イスを指してイスと呼ぶのはふつうのことです。イスを「知っている」のは常識なのです。

こうして私たちが当然「知っている」ことのなかで、自分自身もつとも「知っている」ものはなんでしょうか。ほかの誰よりも自分自身が「知っている」もの、それは私たち自身ではないでしょうか。私たちは、この世に生まれたときから、私たち自身、自分自身と（I）時中一緒にいます。これまでずっと離れることがなかったし、そしてこれからもずっとそうでしょう。私たちは誰よりも自分自身と一緒にいるので、秘密にしていることなど、ほかのひとが知らない自分自身のこともよく「知っ

いる」のです。ですから私たちは、自分自身のことを何よりも、誰よりもいちばんよく「知っている」はずで、自分のことは自分がいちばんわかっている」と言われるように、私たちが自分自身を「知っている」のは当然であり、それがまさにあたりまえのこと、ふつうのこと、常識なのです。

私たちは、「知っている」ことに疑問を持ちませんし、自分自身のことはもちろんのこと、目の前にあるもののも、身の周りにある世界のことも「知っている」と言います。けれども世のなかには、^①私たちが当然「知っている」ことを、やはり「知らない」と言うひとがいます。

たとえば、イスやコンピューターのことを知らないひともあるかもしれませんが(赤ちゃんがイスを知らない、というような、人間の認知能力の問題は、ここでは除外しておきます)。実際のところ、コンピューターが普及していない地域はありますから、その地域のひとがコンピューターを知らないことはありえるでしょう。またコンピューターが発明される^bはるか以前の時代ならば、誰もコンピューターを知っているはずがありません。

このように、ひとや時代や地域が変わると、当然「知っている」と思われることを、知らないことがあります。では、私たちが「知っている」と言えるのは、あたりまえのことでもふつうのことでもなく、常識でもないことになるのでしょうか。

自分自身が誰だかわからない、自分自身のことを知らないというひとはいらっしゃいます。私たちがはちがつて、自分自身のことを知らずに生活しているひとが、どこかの地域にいらしてはいかがでしょうか。私たちがはちがつて、大昔のひとは自分自身のことを知らずに生きていたのでしょうか。いずれもそんなことはありません。いつの時代にも、どんな地域でも関係なく、誰であつても、私たちと同じように、自分自身のことを「知っている」と言っています。ということは少なくとも、私たちが自分自身のことを知らない、ということはありません。私たちは誰もが自分自身のことを「知っている」し、私たちの「知っている」自分自身は、絶対に自分自身なのです。

するとやはり、「私たちが「知っている」と言えるのは、あたりまえのことでも、ふつうのことでも、常識でもないのだ」と言うことはできないのです。

たしかに、私たちは自分自身のことを誰よりもいちばん「知っている」と言えますし、知らないことはありません。けれど

も、^② 次のような経験をしたことはないでしょうか。

周りの家族や友人から、「暇なとき、いつも髪の毛を触っているね」とか、「ごまかそうとすると鼻をかくよね」とか言われてハッとしたことはないでしょうか。ちよつとした態度や表情、しぐさなど、自分自身のクセを誰かに指摘されて、驚いたり恥ずかしい思いをしたりした、というような経験です。このとき私たちは、いちばん「知っている」はずの自分自身に、知らない面のあることを気づかされます。しかもそれは、私たち自らがわかるのではなく、ほかの誰かから指摘されるのです。ですから私たちは驚いてしまうのです。

このような経験をすると、私たちが自分自身のことをいちばん「知っている」とは、本当は言えないのだというのがわかります。そしてこのことから私たちは、「どんなことでも絶対に知っている」と言えなくなってしまうし、それを「あたりまえのことだ」とも、「ふつうのことだ」とも、「常識だ」とも言えなくなってしまうのです。

ではこのときに、自分が知らなかったのだと、素直に認めるでしょうか。 3、知らなかったと思われぬように振る舞うでしょうか。知らなかったクセをほかの誰かから指摘されても、以前から知っていたかのような素振りをしてはいないでしょうか。こういう素振りをしてしまうならば、そこには常識というワナが待ちかまえています。

たとえば「あなたは常識がない」と言われたら、きつと嫌な気分にとても恥ずかしい気持ちになるでしょう。「そんなことも知らないのか」とな^Aじられることもあるでしょう。世のなかでは、常識を知らないこと、非常識であることは、ダメなことだと思われています。常識は知っていて当然なのです。ですから私たちは、非常識と思われぬようにして、そしてなんでも「知っている」かのような顔をして、日々過ごしてはいないでしょうか。こうして、知らないなんてありえない、「知っている」のが当然でなければならぬ、という気持ちにとられます。これこそが、常識というワナなのです。

実際私たちは、「知っている」とは言えない経験をいくつもしているはずですが、それにもかかわらず、私たちは、そうした経験がまるで最初からなかったかのように、^③なんでも当然「知っている」ように思っています。そして世のなかには「知っている」ことしかないかのように振る舞い、知っているのが「あたりまえだよ」とか「常識だよ」とか言います。知らないことが出てきても、「本当は知っているのだ」と言い張ります。そこまで強く言い張らないとしても、自分に知らないことがあるのを認めない

でしょう。自分自身についても、すべてを知らないことはなくても、ある程度は知っていると見えるでしょう。

4 クセを

指摘されたときにように、知らないこともあります。それなのに私たちは、まるで知らないことがないかのように過ごしているのです。私たちは、《 X 》に陥ると、自分自身の無知をごまかし、なんでも知っているかのような態度を見せようとしてしまうのです。さもないと、非常識だ、無知だと思われてしまうからです。あたりまえのことやふつうのことや常識を知らないなんてありませんし、あつてはならないのです。

こうして私たちは、すべてを知っているわけではないのに、知っているつもりになるのです。

私たちがふだん「知っている」と思っていることは、実は本当に知っているではありません。私たちは知らない面のあることに気づかないままの状態です。たとえば自分自身とは、ほかの誰かから指摘されたクセも含めて自分自身なのですが、そのことを私たちは知らずにいます。私たちは、自分自身の全部を知っているわけではないのに、ある程度までわかっているだけで「知っている」と言ってしまうのです。このように、ふだんの私たちが「知っている」と言っていることは、特定の角度しか見えない、部分的で一面的な知識にすぎないのです。

こういう部分的で一面的な知識のことを、偏見と呼ぶことができます。私たちはふだん、常識というワナにとらわれていると、こうした偏見しか持っていないのに「知っている」と言って、知っているつもりになっています。これだと私たちは、本当の意味で知ることができません。それでは、私たちはどうしたら、常識というワナから脱け出して、^④偏見を持たずに「知っている」と言うことができるのでしょうか。

先ほどの事例で私たちは、自分自身のことを誰よりも「知っている」はずなのに、私たちの知らない自分自身がある、ということに気づかされてきました。しかも、その知らない自分自身のこととは、ほかの誰かから指摘されました。このとき私たちは、常識というワナから脱け出すチャンスを得ています。そして私たちは、知っているつもりではなく、本当の意味で知っていると言えるふたつを知ることになるのです。

私たちは第一に、自分たちには知らないことがあることを知ります。これがなければ、私たちはそもそも知りたいと思うこともないでしょう。知りたいと思うきっかけとなるのが、知らないことを知ることなのです。そして私たちは第二に、自分たち

には「知らないことがあることを知らずにいる」ことを知るので。これがなければ、まるでなんでも知っているかのように錯覚し、自分自身の知識にたいして傲慢になることでしよう。私たちは、自分自身について知らない面があるのに、自分自身のことを「知っている」のだと、^B何食わぬ顔をして生活している自分自身に気づかされるのです。

さらに私たちは、自分自身の知らないことを、ほかの誰かが知っているのに気づきます。それは考え方や価値観が、自分自身が思っている以外にもあることを意味します。このことから私たちは、自分とは異なるほかの誰かの考え方や価値観のあることに気づけるようにもなりますし、考え方や価値観が多様であることに気づけるようになるのです。

このように私たちは、常識というワナから脱け出すことによって、絶対にそうだと思っていることが「知っている」こととは限らないとわかります。そして私たちは、まずこのふたつを知ることによって、本当の意味で知っているとはどういうことか、あらたな問いがはじまるのです。

(青柳雅文『疑う、知る、考える 哲学をはじめ』(ミネルヴァ書房)より)

問一、
1 4 に入ることばとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、しかし イ、そこで ウ、それとも エ、たとえば オ、つまり カ、ところで

問二、二重線部 a・b と同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「の」

ア、ひまわりのような笑顔がまぶしい。
イ、祖母の作るシチューが最も好きだ。
ウ、猫のミケは家族から愛されている。
エ、調べ物に使うのは主にパソコンだ。
オ、学校の図書室は蔵書が非常に多い。

b 「れる」

ア、校長先生は絵を描かれる。
イ、どんな意見も受け入れられる。
ウ、弟は動物によく好かれる。
エ、故郷の両親がしのばれる。
オ、近くならずに行かれる。

問三、波線部 A・B の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 「なじられる」

ア、見下される

イ、あきれられる

ウ、大変驚かれる

エ、忠告される

オ、非難される

B 「何食わぬ顔をして」

ア、あきれ返ったようすで

イ、関係ないふりをして

ウ、自分勝手なふるまいで

エ、誇らしげなそぶり

オ、関心のないようす

問四、(I) に入ることばとして適切なものを漢字二字で答えなさい。

問五、本文には次の一文が抜けている。どこに入れたらよいか。この直後にくる七字を本文中から抜き出しなさい。

先ほど述べた、自分自身を「知っている」場合はどうでしょうか。

問九、《 X 》に入ることを、十字以内で本文中から抜き出しなさい。

問十、傍線部④「偏見を持たずに『知っている』と言うことができる」とあるが、このような状態になるにはどのような状態になるにすればよいか。四十字以内で答えなさい。

問十一、本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1、知っているはずのことを知らないひとのことを非常識だと感じるのは、ごく自然なことである。
- 2、本当の意味で知っていることはどういうことか考えるために、自分の知っていることを知るべきだ。
- 3、自分の知っていることと知らないことを見極めることで、自分以外のひとの考え方が理解できる。
- 4、ものは誰もが同じように知っているが、ひとについては誰もが同じように知っているわけではない。
- 5、自分が知らないことを他者が知っているとわかれば、考え方や価値観が多様であることに気づける。
- 6、知らないことは多くあるのにそれを認めないのは、非常識と思われるのを避けようとするためだ。
- 7、常識や偏見を持ってしまうと、自分が知っていることだけが正しいと思い込んでしまうことになる。

